

おそろべき破壊力に耐え抜く

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

「苦しみに耐えることは、死ぬよりも勇気がいる」
(ナポレオン・ボナパルト)

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」

(『聖書(口語訳)』『ローマ人への手紙』5章3〜4)

五月六日までとされていた政府の緊急事態宣言は、予想の通り延長されました。「接触七(八)割減」が実現されていないことが大きな理由の一つのようですが、もともとその目標は「クラスター潰し」として立てられたもので、たとえ感染者が減つてもいきなり「自粛」を解除すれば再び増えてしまうでしょう。なぜなら、感染しても無症状の人(無症状病原体保有者)が大勢いるからです。

しかし、ようやく「出口」の明かりは見えてきました。まことに喜ばしいことです。今後は地域により、段階的、条件付きで「自粛」が解除されていくでしょう。そうしていかなければ、日本経済は壊滅してしまいます。なんとか持ちこたえるギリギリのところ、今は至っているのです。

全国の倫理法人会の集会活動も、可能な所から順次始まっていきます。感染者が少なく、すでに再開した県もあるのは嬉しいことです。今回は書きたい

ことがいろいろあり、例月より長くなりますが、よろしくおつきあいください。

*

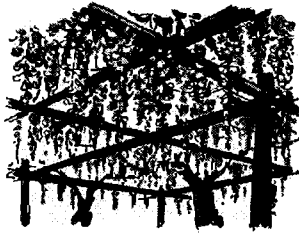
中国の武漢市で新型コロナウイルス(COVID-19)の発生が確認され、WHOに報告されてから四ヶ月あまりが過ぎました。現在の時点で立ち止まって振り返るとき、今回のウイルスの「破壊力」の大きさに改めて驚かされます。

日本で最初の感染者が報告されたのは一月十六日でした。やがて感染は欧米をはじめ百を超える国々に広がり、パンデミックが宣言されました。世界各国の主要都市では相次いで封鎖や移動制限が実施され、世界中が大混乱に陥ったのです。

新型コロナウイルスそのものの感染力が強いからだけではありません。未知のウイルスというところで、情報が氾濫した「インフォデミック」が大きな要因です。テレビをはじめとするマスコミはもちろん、インターネットによるSNSが浸透したことで情報が拡散しやすくなり、二〇〇三年のSARS(重症急性呼吸器症候群)流行時と比べて、六十八倍にもなったといえます。

とくに疫病が流行する際には、出所不明の情報が広がりやすく、人々は何を信じてよいかわからず、過剰に怯おびえます。筆者は日本でマスコミが盛ん

(次ページにつづく)



に報道するようになった頃、「どうしてそんな騒ぎ方をするのか」と不思議に思い、周囲にも伝えました。その偏った騒ぎ方が危機を増幅する、と危惧したのです。

なぜなら、二〇〇九年に新型インフルエンザが発生しました。感染力の強いインフルエンザが発生した、もしそれが強毒性に変異したら大変なことになる……。あのときWHOはパンデミック宣言までして、日本でもテレビに専門家なる人たちが登場し、盛んに危機を煽りました。筆者も団体の長として、感染症についてにわか勉強し、会員の方々に注意を呼びかけました。ところが大騒ぎしたにもかかわらず、夏になるとウイルスはほとんど消えてしまったのです。

もちろん今回の感染拡大は十一年前のそれとは異なります。政府の対応は後手後手で、専門家の見解もまちまちでした。これからも油断は禁物です。問題はマスコミで、とくにテレビは恐怖を煽るのかのように誇張した表現を多用して騒ぎました。ほとんどテレビが情報源の九十歳になるわが母親は、ひどく怯えて買物にも行けなくなりました。

報道の内容にしても、「感染拡大」と頻繁に言いながら、感染者や死者の累計数ばかりを伝えました。感染症の流行とはねずみ算のように、指数関数的に増えていくのが常です。欧米はそれに近くなりまし

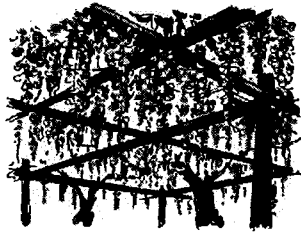
たが、日本ではまったくそうはなっていないでし
た。たとえ一日に五十人、六十人増えたとしても、
治癒している人もいるわけですから、それまでの感
染者の累計からすれば、少しずつ増えてはいるもの
の（累計数が減ることはありません）、「現在のところ
感染は落ち着いて推移している」とまず言うべき
でしょう。注意を呼びかけるのは結構ですが、不安
をかき立てるような表現や伝え方は本末転倒です。
大切なのは「正しく恐れる」ことで、不安ばかりが
大きくなれば、人々のストレスは昂じて、免疫力も
低下してしまいます。

*

本物のウイルスよりもはるかに破壊力の強い人
工的な「恐怖ウイルス」が、世界中を席卷している
のです。それによって、日本人の「日常」も破壊さ
れてしまいました。不可解な疑念はいくつもあり、
政治的な思惑も交錯しているようで、庶民はモヤモ
ヤしたまま政府や自治体の要請に応じてきました。

思い返すと、全国の小中学校を臨時休校させ、各
種イベントの自粛が要請された二月二十六日から、
日本中の空気が一変しました。「ウイルスは怖ろし
い」「自粛は仕方がない」の空気が国内に瀰漫しま
す。東京ディズニーランドが早々に休園すると、ど
こも右にならえです。空気に過敏な日本人ですから、

(次ページにつづく)



「ウチだけは開催する」とはとても言えなくなりました。当初は「無観客でも行う」としていた選抜高校野球までが、三月十一日に中止を決定します。九年前の東日本大震災のあとでも実施されていた国民的人気の高いスポーツまで破壊されました。プロ野球はいまだ開幕もできず、日本サッカー協会は事務局まで閉鎖がつづいています。

ほぼ年間計画の通りに開催される各種のスポーツこそ、現代の庶民の穏やかな「日常」を象徴するものでしょう。それが現在は、ほぼ全滅です。なんと東京五輪まで延期を余儀なくされました。さらに、都道府県間の移動は禁じられているに等しく、新幹線や航空機はガラガラ。国際航空路の大半が止まり、世界は鎖国に近い状態になっています。なにより驚くべきは、そうした事態を「仕方がない」とあきらめざるをえない空気に、われわれが慣れてしまっていることでしょう。それこそが「日常」の破壊にほかなりません。

しかし繰り返しますが、「出口」の明かりは見えてきました。いまは何よりも国民が一致協力して「恐怖ウイルス」の破壊力に耐えなければなりません。経営者は「仕方がない」ではなく「仕方はある」と気構えを正し、「出口」の先まで見据えた準備に取りかかる時です。もちろんその先も続く苦境の道に對して、覚悟を定めなければなりません。

*

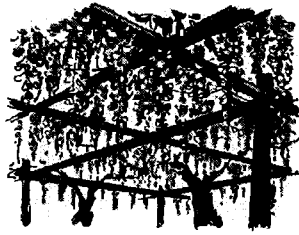
未知のウイルスによる感染症の蔓延は、対応が実によくつかない災厄であると思われられました。発病者や死者だけでなく、国民の全員が被災者となつてしまいます。局地的な大規模自然災害の場合のようには、特定の被災者を救済したり、復旧や復興に資する具体的なアクションをほとんど起こせません。

一九九五年の阪神淡路大震災のとき、倫理研究所では相応の義捐金を贈る以外にも、神戸倫理会館を拠点にした救済ボランティア活動を展開しました。われわれ職員がチームを組んで交替で現地に入り、会員有志の方々と一緒に、労力を提供しました。各地の会員から自転車を集めて被災者に贈呈したり、無料の理髪サービスも喜ばれました。

二〇一一年の東日本大震災の際には、被災地があまりに広範囲に点在していたため、救済活動は断念し、義捐金の贈呈のほかに、「りんりん基金」(会員の寄付と本部の拠出金による)を創設して、息の長い教育支援をスタートさせ、今もなお続いています(詳しくは倫理研究所のHPをご覧ください)。

そのほかにも、大きな地震や台風高潮による災害など、各地で発生するたびに被災地への支援活動をしてきました。ところが今回の新型ウイルス感染症危機に對しては、そうした具体的なアクションを起こ

(次ページにつづく)



せないのが、もどかしくなりません。全国民が被害を蒙り、「自粛」解除後の見直しもはつきりせず、インフォデミックな要素の強い災厄であること等々、物財や労力を提供して済む事態ではないからです。

筆者がもつとも心を痛めたのは、経営上の苦境に呻吟しておられる会員の方々に対して、直接的な支援が何もできないことでした。このような非常時に遭遇して、倫理研究所として出来ること、また為すべきことは、その本分である「純粹倫理」および「倫理経営」の学びと実践を推進することで、皆様に大苦難を乗り越えていただくアシストをすることしかありません。

倫理法人会の多くの会員の皆様におかれましては、この苦境に耐えながら、企業の維持と立て直しに八方手を尽くしておられると存じます。どうかいましばらく、耐え抜いてください。心が折れないよう、倫友諸氏と励まし合い、本部のサポートも活用してください。

この非常時に、集会の場が奪われながらも、インターネット回線を活用して、倫理経営の学びや会議の場づくりで腐心されている役職者の皆様には、心から敬意を表します。これから地域ごとに集会活動が順次再開されていくでしょう。しばらくの間の感染予防に役立てていただくべく、些少ながら全軍会

に一律の支援金を贈呈させていただきますので、どうかお役立てください。

*

最後になりますが、つい最近、親しいある大学の教授からのメールにこうありました――

大学も「教育の中で死守してきたこと」を結果として率先して崩さねばならなくなり、もう、パндеミックが終わっても同じところには戻れないところまで来てしまったと思います……。

当分は学内閉鎖でオンライン授業一辺倒となつてしまった大学では、昔のような親密な授業やゼミができなくなつてしまったこと。と同時に、近未来に向けての新しい大学建設のアクションを起こさざるを得ない状況になった、ということでした。

今回のパндеミック・インフォデミックの危機は、強大な破壊力を発揮しつつ、人類の文明史の書き改めを余儀なくし、私たちの生活文化、仕事や暮らしの様式まで変更を迫っています。

まずは何よりも現在の逆境を耐え抜き、この大転換を奇貨として、積極的にそれぞれの未来を創造していくほかありません。